

第2章 採集品の調査

第1節 土器

ここでは、今回資料調査した余山貝塚の土器の概要と、それが遺跡の成り立ちにおいて、時期的・地点的にどのような位置を占めるのかを検討する。

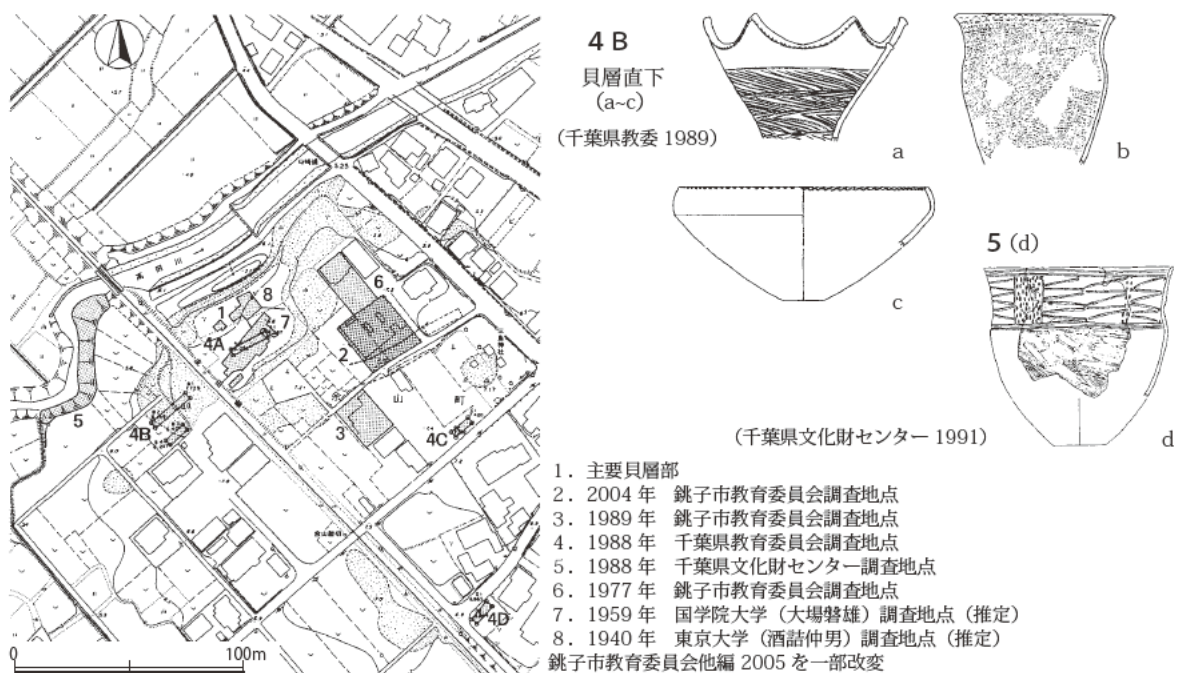
1. 遺跡の形成過程

遺跡は明治期に限らず、戦後から現在に至るまで調査を重ねてきている。当初は貝層部分を中心であったが、近年では遺跡の広がりという課題に沿って、貝層外の地点も対象とされている(第6図)。

報告資料では、後期前葉堀之内2式から弥生初頭の荒海式土器までが確認できる。長期継続した遺跡である。住居跡が東京大学の調査地点で円形・壁柱穴構造のものが2軒、国学院大学地点で1軒検出されている。また多種の遺存体を含む貝層や遺物組成などから、基本的には集落と考えられる。

下総台地における後晩期の長期継続する集落は中期末葉頃から形成が開始される例が多い。しかし、余山では加曽利EIV式～後期前葉堀之内1式土器は極僅かである。主要貝層の外側でも乏しく、やはり長期継続する集落にみられる、次第に分布が集約していくという様相は認められない。続く堀之内2式土器も少ない。東京大学の調査で貝層下の砂層から出土したという堀之内式土器の細別型式が問題となる。一方、下総台地の後晩期に及ぶ集落で、晩期終末の千網式～荒海式までまとまった量を出土する例は少なく、特徴的である。

場の構成の点では、斜面から低地部にかけても活動の場が広がっていたことが明らかにされている。加曽利B1式期には土坑が形成され、礫器などをういた活動を行っている。晩期安行式期にも土坑群が、千網～荒海式期は斜面部に大量の遺物包含層が形成されている。遺跡形成開始のほぼ当初から形成期間を通じて、高地と低地の場を組合せて活動地点を形成していたのであろう。



第6図 余山貝塚と調査地点

貝層は、最も広がる主要貝層が高田川に面して分布する。環状や馬蹄形を呈さない点は、集落の形態をも示唆する。確認できる貝層の時期は滝田氏の調査からみて〔滝田 1986〕早くて加曾利 B1 式期、確実なのは第 6 図 4 B の加曾利 B2 ～ B3 式期の斜面貝層で、主鹹である。晩期の確実な例はまだない。なお、古墳時代以降には、マガキ・ヤマトシジミ主体の貝層が形成されている。

高島の調査地点は主要貝層部である。その形成過程をまとめよう。まず、貝層下の砂層中に堀之内式が出土するという（第 6 図 8）。貝層直下には加曾利 B 式の遺物集積を形成する地点がある（第 6 図 4 B・滝田 x 次調査）。同型式期には貝層が形成される。また、第 6 図 7 の主体は加曾利 B2 ～安行 1 式である〔阿部 2014〕。一方、地点によっては安行 2 式の台付浅鉢や貝輪が収蔵された瓢形注口土器、また晩期安行式土器がまとまる地点も存在する〔江見 1909〕。形成期間は堀之内式～晩期安行式まで及ぶこと、当然ではあるが、層位や地点により時期的な様相や遺物の遺存状況に違いがある事がわかる。

2. 下郷コレクションの内容と位置づけ

高島は、1908 年（明治 41）～1909 年（明治 42）にかけて 5 回の調査を行った。人骨にも注目した発掘は、主要貝層部を対象とした〔高島 1909〕。

今回の資料調査では、43 個体の土器を確認した（第 2 表。やや不確実な A69-2 を除く）。時期は堀之内 2 式～安行 3a 式期に及ぶ。堀之内式は 1 式はなく、2 式の 1 点も検討の余地が残る。主体は加曾利 B1 式～曾谷式で 37 点を占め、各細別型式が存在する。以後は、安行 1 式、3a 式、晩期？が各 1 点と僅少である。

高島の発掘は、貝層下に検出されたという人骨を除き、当時の慣例的である貝層部分までに限られていた可能性は高い。その点で、加曾利 B1 式以降の土器が多い点は、先ほどみた遺跡形成の様相と一致する。一方、江見が報告している安行式以降は少ない点の特徴である。

器種が、精製土器・小形土器に偏るのは、本来の組成ではなく、高島の嗜好や遺物の遺存性を反映したものと考えられる。その点は、ほぼ同時期に行われた福田・椎塚での土器選択の傾向と一致する。

土器には貝カルシウムと推測される白色物質の付着がみられる個体が、数点存在する。時期は加曾利 B1 ～ B3 または曾谷式に及ぶ。この点も、加曾利 B 式期の貝層形成を示唆する。ともに採集された多量の貝輪・骨角器の成品・未成品も、ほぼ加曾利 B 式期を中心としたものと推測することができる。

主要貝層部を発掘した高島の土器資料は、採集内容に偏りはあるものの、地点的・層的内容をある程度反映する纏まりをもつことが明らかになった。なお、個別土器の型式学的検討には課題が残る。

（須賀博子）

【引用・主要参考文献】

- 阿部芳郎 2012 「総論 縄文時代の資源利用と地域社会」『考古学ジャーナル』627 ニューサイエンス社
- 阿部芳郎 2014 「関東地方における製塩土器の出現過程」『駿台史学』150 駿台史学会
- 江見水陰 1909 『地中の秘密』博文館
- 高島多米治 1909 「貝塚叢話」『考古界』8-5
- 滝田正俊 1986 「余山貝塚第 x 次発掘経過並びに結果報告」『余山貝塚資料図譜』国学院大学考古学資料館
- 銚子市教育委員会他編 2005 『不特定遺跡発掘調査報告書—余山貝塚Ⅳ—』銚子市教育委員会
- 千葉県教育委員会 1989 『銚子市余山貝塚確認調査報告書』
- 千葉県文化財センター 1991 『銚子市余山貝塚』

第2表 余山採集の土器

遺跡名	観察	整理番号	枝番	数量	型式	器形	注記	文献	備考
余山	*	A	3	8					
余山		A	24	1	加B2	深鉢	余山		
余山		A	24	2	曾	深鉢	余山		
余山		A	24	3	加B2	深鉢	余山2種		
余山		A	25	1	加B1新	深鉢	余山	D23	
余山		A	25	2	曾	深鉢	余山	D26	
余山 [†]		A	26	1	加B2	鉢	注記なし	D38	
余山		A	26	2	加B2	鉢	余山	D31	
余山		A	26	3	曾	浅鉢	余山	B118 図版5, D32	『縄文集英』では遺跡名なし。
余山		A	26	4	安1	浅鉢	余山		
余山		A	26	5	加B2	浅鉢	余山		
余山		A	26	6	加B2-3	椀	余山		
余山		A	26	7	加B3-曾	椀	余山		
余山		A	26	8	加B1	浅鉢	余山	D34	
余山		A	27	1	堀2?	皿形	余山	B23 図版4・6, D13	
余山		A	28	1	加B3	注口	余山	B73 図版2, D18	
余山		A	28	2	加B2	注口	余山		
余山		A	77	1	加B2	深鉢	余山		
余山		A	77	2	加B1	鉢	余山		
余山		A	77	3	加B1	鉢	余山		
余山		A	78	1	晩?	壺	余山	D49	赤彩。
余山		A	78	2	加B-曾	有孔把手付鉢	余山		復元部分が多い。
余山		A	78	3	加B2	壺	余山		
余山		A	78	4	加B2	壺	余山		
余山		A	78	5	加B1新-3	壺	余山		
余山		A	79	1	加B1	深鉢	余山		
余山		A	79	2	加B1	深鉢	余山		
余山		A	79	3	加B1新	鉢	余山		
余山/薬師台/福田 [†]		A	79	4	加B1	深鉢	余山, 薬師台, 福		
余山		A	79	5	加B2	深鉢	余山		
余山		A	80	1	加B1新	鉢	余山		
余山		A	80	2	加B1新-2	深鉢	余山		ミニチュア。
余山		A	80	3	加B1新-2	深鉢/鉢	余山		
余山		A	80	4	加B3	浅鉢	余山		
余山		A	80	5	加B3-曾	浅鉢	余山		
余山		A	80	6	加B3-曾	浅鉢	余山		「肉塊及骨●付着」ラベル有。
余山		A	80	7	加B3-曾	浅鉢	余山		
余山		A	80	8	加B2	鉢	余山		
余山		A	80	9	加B2	鉢	余山		
余山		A	80	10	加B3-安1	椀	余山		
余山		A	80	11	加B?	椀	余山		手づくね。
余山		A	81	1	加B3	台付鉢	余山		
余山		A	82	5	安3a	手燭形	余山		
余山 [†]		無		1	加B1	鉢	余山		
余山 ^{††}		A	69	2	安3a	浅鉢	注記なし	B84 図版3, D52	余山出土品か要検討

《表註》

i) 遺跡欄・観察欄・管理番号欄・注記欄

上記各欄の註に関しては、前冊の表註 i) ~ v) を参照。大阪歴史博物館 2012 『共同研究成果報告書』6 ; p.22。

ii) 型式欄

型式名の略号は以下の通り。堀=堀之内、加=加曾利 B、曾=曾谷、安=安行

加曾利 B1 式新は、鈴木正博氏（鈴木正博他編 1981 『取手と先史文化』(下)）の加曾利 B1-2 式にほぼ相当する。

iii) 文献欄文献

B : 杉山寿栄男 1928 『日本原始工芸』(1976 復刻発行 北海道出版企画センター)

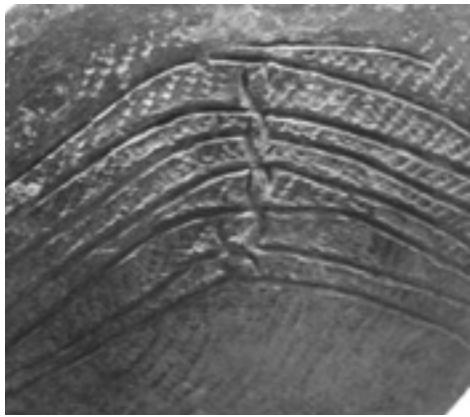
D : 上田舒ほか 1958 『縄文秀英』大阪市立美術館



1
(A79-1)



2 a
(A25-1)



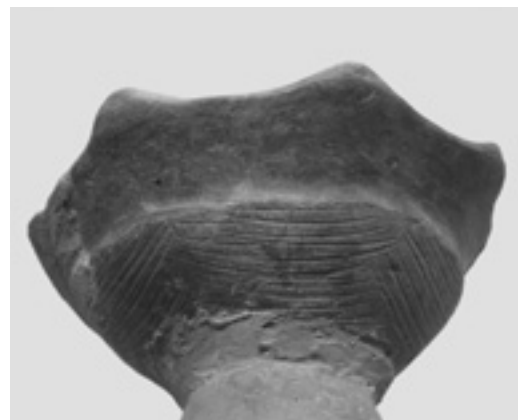
2 b



3
(A24-1)



4 a
(A81)



4 b



5
(A24-2)



6
(A26-4)

第7図 余山貝塚の土器（縮尺不同）